

実践報告

札幌市立西岡北中学校

継続研究 3 年目

(1) 研究内容

研究課題：「アイヌ民族の方を学校に招いて行う体験的学習に関する研究」

- ・先住民族であるアイヌ民族の優れた文化・生活観についての理解を深める。
- ・歴史の中で、差別や貧困にさらされたアイヌ民族の存在について理解する。
- ・互いの違いを理解し、尊重しあう中で「共生社会実現」への主体者の意識を高める。

(2) 実践の内容

【実践①】「交流までの学習」について

○ねらいと学習内容

- ・地理、歴史、公民それぞれの分野で学んだ「アイヌ民族・平等権・先住民族の国際性」などについての既習事項を整理するとともに、カナダやオーストラリアの多文化主義に代表される、多文化理解の本質を理解する。
- ・「イランカラプテ」に代表されるアイヌ語のこころや、精神に興味や関心を高める。

【実践②】「アンコラチメノコウタラの方々をお迎えして」について

○ねらい

- ・集会形式でアイヌ民族の歴史や、和人との関わりに関するお話を聞いたり、伝統的な舞踊を踊ったりする活動を通して、アイヌ民族の歴史や文化に親しむ。
- ・この体験をきっかけに、多文化の理解と、人権の尊重という意識を高める。



【写真】 ムックリやトンコリなどの器楽合奏の鑑賞



【写真】 学年全員交えての「輪踊り」の体験

○学習内容

- ・アイヌ民族の歴史の講話を聞いたり器楽演奏、舞踊を鑑賞したりする。
- ・アイヌ民族舞踊の「輪踊り」を生徒全員で体験する。

(3) 研究のまとめ

① 成果

- ・「アンコラチメノコウタラ」の方々のお話は大変分かりやすく、生徒は過去や現在のアイヌ民族の置かれている立場や境遇に対し、知りたいという意欲を高めていた。また、優しい語り口なので、生徒は親しみを感じながら聞いていた。舞踊体験や輪踊りでは、当初戸惑っていた生徒もいたが次第に打ち解け、感謝の気持ちをもち触れ合っていた。
- ・生徒は生の演奏や舞踊に触れる中で、興味をもち関心を高めていた。独特な楽器の形状や音色の響き、アイヌ抒情詩の声の豊かさに聞き入っていた。

② 課題

- ・中学校社会科においては、1年次で他国、地域の先住民の現状や多文化主義の取組2年次には日本の歴史単元における先住民の歴史、法整備などの学習、3年次は国際社会における人権の取組など、それぞれ系統だって学習が進められている。今後はそれらをより横断的に関わりをもたせ、体験的な活動も融合することで、生徒にとってより分かりやすい学習に発展させていく手だてが必要である。
- ・今も昔も共にこの地で暮らしているアイヌ民族の方々の存在を知り、偏見や差別をなくし、互いの文化を理解し、共存していく気持ちをもち続けることができるような実践にしていくことが大切である。
- ・アイヌ民族にとどまらず、社会生活のあらゆる場面において人権の大切さを常に意識できる主権者を育てていくことが求められる。

③ 提言「人権教育のすすめ」

- ・今回の体験は、本校において3年目となる活動である。毎年地道に同じような活動を続ける中で、見えてきたこともある。それは、人権教育は書物の中や言葉で語ることだけにとどまらず、より主体的に関わりをもつことで、生徒の心に染み込んでいくものだということである。
- ・生徒たちは、こういった体験を重ねることで、北海道におけるアイヌ民族が形作ってきた伝統や文化をより一層理解し、親しみを感じているなどの変容が見られる。
- ・このような体験は、先住民族の方々への理解・融和だけにとどまらず、身近にいる人を大切にするといった心の面を育てる教育にもつながっていると考える。子どもたちの中で育まれてきた人権に対する意識が、普段の学校生活や家庭生活の中でさらに成長していくように手助けをしていく必要がある。
- ・教員自身が人権に対する意識を再確認する良い機会となった。